

社会主義の経済システム

現代・計画・市場

岩田 昌征

現代経済学叢書

29

新評論版

著者紹介

岩田 昌征

いわ た ます ゆき

1938年 東京に生まれる

1963年 東京大学文学部西洋史学科卒業

1963年 一橋大学大学院社会学研究科入学

1964年10月～1967年10月 ユーゴスラヴィア留学

1969年 一橋大学大学院修士課程修了

現在 アジア経済研究所調査研究部勤務

著訳書 『比較社会主義経済論』日本評論社, 1971.

『労働者自主管理』紀伊国屋書店, 1974.

O. ランゲ『再生産と蓄積の理論』(共訳)

日本評論社, 1966.

O. ランゲ『最適決定論』(共訳) 合同出

版, 1970.

M. マルコヴィチ『実践の弁証法』(共訳)

合同出版, 1970.

M. ケーザー『現代ソヴェト経済学』(共

訳) 平凡社, 1973.

社会主義の経済システム

(検印廃止)

1975年12月5日 初版第1刷発行

著者 岩田昌征

発行者 二瓶一郎

発行所 株式会社 新評論

T160 東京都新宿区西早稲田3-16-28

電話東京(202) 7391番

振替東京 113487番

落丁・乱丁本はお取替えします

印刷 白鷺舎(115)

製本 河上製本所

© 岩田昌征 1975年

Printed in Japan

3333-331029-3177

目 次

序 章	5
-----	---

第Ⅰ部 視点と方法

第1章 現代社会の認識論	19
--------------	----

——社会科学的知性の運命——

はじめに	19
第1節 現代社会の生産力の規定	21
第2節 社会科学的認識の成立とその根拠	28
第3節 近代的知性への批判	35
第4節 現代社会における社会科学的認識のジレンマ	41
第5節 現代的知性構築の徒勞	51
第6節 現代社会における社会科学的認識の可能性	63
第2章 社会主義経済研究論	74
第1節 社会主義経済研究の意味	74
第2節 社会主義経済研究の視座（方法論的構造）	80
1 過渡期の概念（81）	
2 過渡期形成の目的意識性（81）	
3 理念像・制度・生産関係（83）	
4 社会主義経済研究の三視座・四領域（84）	
5 社会主義経済のタイプ認識（85）	
6 経済社会の五次元標識（86）	
7 マルクス・エンゲルスの社会主義論と五次元標識（88）	
8 ある批判へのコメント（90）	
第3節 社会主義経済研究の分業論的構造	92
1 研究分業的構造（92）	
2 社会分業的構造（99）	

第Ⅱ部 テクノクラート型社会主義

第3章 集権制経済システムの変動	107
------------------	-----

2 目 次

第1節	研究対象	107
第2節	過渡期論の諸類型	109
第3節	過渡期の作業仮説	113
第4節	経済システムの変動	117
第5節	経済システムの運転と変革	129
第4章	集権制経済システムの改良とソ連邦数理経済学派	137
第1節	数理経済学のモデルと手法に関するソ連共産党の姿勢	137
1	Л.И. プレジネフ報告より (137)	
2	A. H. コスイギン報告より (138)	
3	第9次5カ年計画にかんする大会の指令より (139)	
第2節	国民経済の最適展望計画化システムの建設研究	141
第3節	数理経済学派の提案する現行経済システムの改良案	144
第4節	数理経済学派の最適経済計画化・管理システムの理論的基礎	150
1	伝統的価格モデル (150)	
2	伝統的価格モデルによる個別的意思決定 (151)	
3	統一的目的関数の設定 (155)	
4	全体目的と個別目的の関係 (158)	
第5章	集権制経済システム研究の基礎概念	163
第1節	目的をもつシステム	163
1	目的関数 (163)	
2	制約条件 (164)	
3	目的関数の形 (165)	
第2節	階層制	169
1	集計度=0の二層制 (169)	
2	市場メカニズム (179)	
3	商品論としての分離性説へのコメント (182)	
4	集計度>0の二層制 (188)	
5	三層制 (194)	
第3節	頂上の切断された二層制と頂上の切断された三層制	196
第6章	集権制経済システムの運営技術	199
第1節	問題状況	199
第2節	機能フレームと機能特性	204

第3節	計画編成プロセスと現実	212
第7章	ソ連邦数理経済学の課題	226
第1節	数理経済学の登場	226
第2節	数理経済学の課題	229

第Ⅲ部 自主管理型社会主義

第8章	労働者自主管理の理想と現実	241
はじめに		241
第1節	集権制経済管理と労働者の地位	243
第2節	労働者自主管理の形成と発展	246
1	労働者自主管理の誕生前夜 (246)	
2	労働者自主管理の誕生 (249)	
3	労働者自主管理の定着 (253)	
4	労働者自主管理の深化 (256)	
5	労働者自主管理の転機 (258)	
第3節	労働者自主管理制度の実例	263
1	新しい制度を求めて (263)	
2	基層組織 (265)	
3	中央組織 (267)	
第4節	労働者自主管理制度における意思決定過程	269
1	ある工場の合理化過程 (269)	
2	労働組織＝企業における意思決定過程の特徴 (272)	
3	労働者自主管理制度の機能における諸困難 (276)	
第5節	労働者・学生・共産主義者同盟	281
	(付) 学生行動政治綱領 (289)	

第9章	ユーゴスラヴィアにおける計画思想の歴史的変遷	293
	——考察素材の紹介——	

はじめに		293
第1節	集権制経済管理期の計画化思想	294
第2節	新経済システムの誕生期における計画化思想	297
第3節	ユーゴスラヴィア型経済システムの成立期における計画化思想	304
第4節	市場メカニズム確立以後における計画化思想	321

4 目 次

第10章 ユーゴスラヴィア社会主義の経済システム	336
第1節 所有制	336
第2節 経営管理様式	339
第3節 分配関係	343
第4節 社会的分業の編成様式	350
第5節 社会経済主体	355
あ と が き	359
索 引	363

序 章

本書は、私がここ数年間に発表してきた諸論文を基にして、足らざるところをかなり大幅に加筆し（特に第1章、第2章、第3章、第5章）、重複せるところを削除しつつ（特に第8章、第9章）、現代社会主義経済体制論序説としての統一性を狙ってでき上がった研究書である。私は、これまでに『比較社会主義経済論』（日本評論社、1971年）、『労働者自主管理』（紀伊国屋書店、1974年）という2冊の著書を世に問うてみた。それらは、いわゆる書き下しであり、したがってあらかじめ設定された1個の主題、あるいは1本の思考軸に沿って叙述されており、よくいえば、論理の筋道が明確であったが、私が様々な方向に試みていた模索を十分なふくらみを持って記述しうるスタイルではなかった。それに対して、本書は、異なる時点で異なる視角から異なるテーマについて論述した諸論文の統合*であるが故に、私の思考内容を「十分なふくらみを持って」とは形容できないまでも、前2著よりは包括的に伝達しえていると思う。

* ここに各論文を最初に掲載した雑誌、あるいは書物を参考までに記しておこう（第7章は未発表論文）。

第1章 『経済評論』1973年11月（「現代社会における社会科学的知性の運命」という標題で）。

第2章 『現代の理論』1973年5月（「社会主義経済研究とは何であるか」という標題で）。

第3章 富永健一編『社会学講座第8巻・経済社会学』東大出版会、1974年10月（「社会主義経済体制の変動」という標題で）。

第4章 五井一雄編『現代社会主義経済制度の集権化と分権化』アジア経済出版会、1973年10月（「ソ連邦の計画経済システムの改善と数理経済学派」という標題で）。

第5章 五井一雄編『現代社会主義経済制度の集権化と分権化（続）』アジア経済出版会、1974年11月（「集権制計画経済研究の基礎概念」という標題で）。

第6章 『アジア経済』1972年9月（「集権制経済システムの運転技術について——青木昌彦『組織と計画の経済理論』をめぐって」という標題で）。

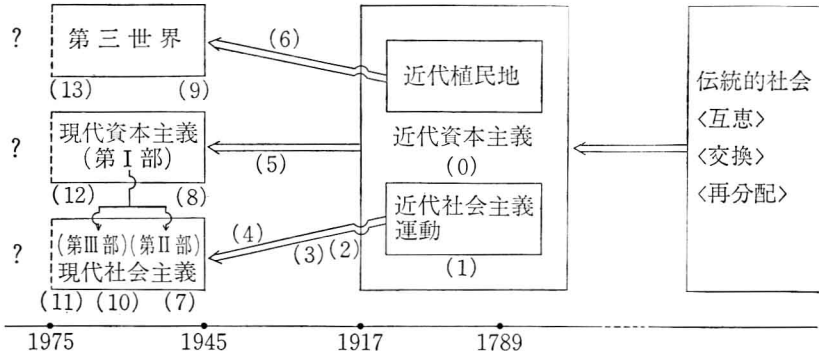
第8章 玉野井芳郎編『講座人間の世紀第6巻・文明としての経済』潮出版社、1973年10月（ただし、第8章第5節は、マルコヴィチ著・岩田／岩淵訳『実践の弁証法』の「解説にかえて」を収録、合同出版社、1970年5月）。

第9章 佐藤経明編『ソ連・東欧諸国の経済改革』アジア経済出版会、1973年12月。

第10章 野々村一雄編『社会主義経済論講義』青林書院新社、1975年6月。

もちろん、「異なる時点・視角・テーマ」といっても、全くバラバラなのではなく、私の方法意識に即して書いてきた諸論文であり、1冊の書物を構成しうる内的連関性を有している諸論文である。その内容的連関性のフレームワークを示したものがA図*とB図である。

A 図



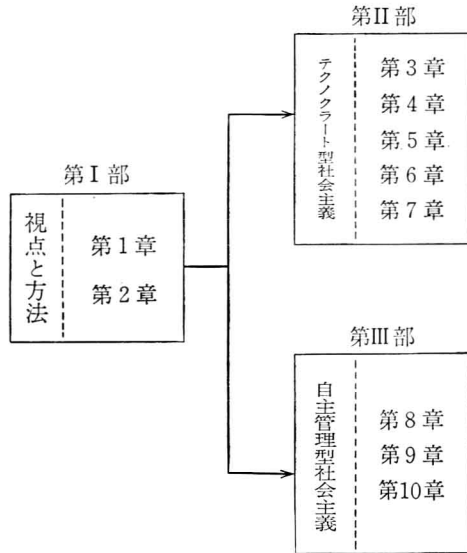
第I部「視点と方法」では、私が最も現代的な資本主義社会である日本国家のある研究所 Anstalt に席を占めつつ、社会科学を職業的・専門的 Professional

* A図における(0)から(13)までの番号は、私が近・現代史を社会主義に引き付けて構成しようと試みる場合——他に、資本主義自身の生成・発展・世界化・その停滞という軸に即して、植民地の形成・民族独立・第三世界の誕生と模索という軸に即して、近・現代史を構成することもできるが、私の力量の及ぶところではない——、重大な結節点となるべきテーマを示している。

- (0) マルクスの『資本論』＝近代資本主義の原理論
- (1) 近代社会主義思想と運動の成立
- (2) 最初の社会主義革命
- (3) ソ連邦20年代の社会主義建設論争
- (4) スターリン時代・集権化・工業化
- (5) ナチズムとニューディールの勝利、西欧コミニズムの敗北
- (6) コミンテルンと植民地・従属国の民族主義・共産主義運動
- (7) 第2次世界大戦の終焉と人民民主主義体制の成立
- (8) 社会民主主義と福祉国家の成立
- (9) 民族独立と第三世界の成立
- (10) 社会主義経済体制の再生産構造
- (11) 現代社会主義の反省——人間の顔をした社会主義と文化大革命——
- (12) 福祉国家の矛盾と社会主義運動
- (13) 第三世界の模索——OPEC からアジェンデまで——

私が専門に研究している領域は、上記の中の(10)にすぎない、本書の第I部第2章で論じた社会主義研究の有機的分業が望まれる所以である。

B 図



に研究することで日々の生活の糧を得ているという事実と私の社会認識との関係が反省的に考察されている。まず、現代社会に生きる認識者が直面する現代的運命について考え(第1章)、次いで資本主義とは経済社会の構成原理を異にする社会主義の諸問題を認識対象に選定した場合に特に要請される研究方法について論を試みた(第2章)。ここで注意しておくべきは、第1章で展開した〈ものの見方〉と第2章の底にある〈ものの見方〉の間にある弱く言えば

「ずれ」、強く言えば「矛盾」のことである。私は、自分自身の有するこのような矛盾せる2つの視点をそれぞれ〈右眼〉と〈左眼〉と称している。

〈右眼〉に従うならば、現代資本主義のみならず現代社会主義もそれ自体として普遍人類的な価値を担うもの＝普遍的人間像を生み出す生命力を持つ経済社会であるとはもはや認定されない。両者とも諸々の特殊利害人のいづく特殊利害の一時的・通過的妥協装置にすぎず、未来の世界は、現代資本主義の延長にも現代社会主義の延長にも展望できない、と想定する。左眼に従うならば、上述のごとききざしを否定するものではないが、現代社会主義は、今でも何か普遍人類的な価値理念を追求する試行錯誤プロセス(錯誤が多すぎるにせよ…)にあり、そこに見られる病理は、小児病ではあっても自律的な回復の不可能となった老人病ではない、と想定する。

現代社会主義を研究する者は、このように矛盾する複眼を兼具し、各自の生活座標から視線を認識対象に照射することによって、対象の姿がヨリ立体的に見えてき、対象の持つ現代史的意味がヨリ具体的につかまえられるのではなかろうか。このように主張したいのである。しかし、叙述は、矛盾した視点から行ないえない。それは、論理学の法則の禁止するところである。あえて、論理

学の法則にさからって、両眼的認識の像を忠実に文章（言明）化してみても、その結果は、焦点を結ばぬ複数の像，すなわち精神病理学で言う複視現象となってしまう。それ故に、両眼を止揚 *Aufheben* した統一的視点が認識プロセスの中で創造されぬ限り、認識の成果は、左右いずれかの単眼を主眼とすることによって整序されるほかに道はない。ここに無理が生じる。しかし、この無理は、矛盾する言明＝精神病的複視を避けるために不可避のものである*。第Ⅱ部「テクノクラート型社会主義」と第Ⅲ部「自主管理型社会主義」では、第Ⅰ部で設定された両眼によって、——とはいえ、どちらかといえば左眼に傾斜しつつ——ソ連・東欧諸国の経済的諸問題、特に経済システムに関する諸問題を観察し、考察して得た諸成果を左眼を主眼とする立場で整序して得られた諸命題を叙述している。私の社会科学方法論によれば、「両眼で見よ！ しかし、現代には両者の止揚の現実的可能性はない。したがって、単眼にもどって整序せよ！」というところまでは、学問論として主張できるかもしれない。けれども、左眼を選ぶか右眼を選ぶかは、生身の研究（認識）者が現代人として主体的に行なう価値判断である。

現在まですでに14カ国に達している社会主義諸国の中から本書の叙述対象としてソ連邦とユーゴスラヴィアを選択した。その理由は、私が前2著において〈国権主義的社会主義〉〈民権主義的社会主義〉という風に概念化した社会主義経済の2つの類型が両国にクリアーに観察でき、また、それらを考察する素材が豊富に存在する、というところにある。両国と並んで、社会主義建設プロセスで意欲的な実験を重ねている中国や朝鮮について論じていないのは、もっぱら私の語学的制約の故であって、アジアの社会主義建設の試行を視野の外においても社会主義の経済システムを理論化できると私が考えているわけではない。

ソ連邦とユーゴスラヴィアの経済システムを研究の主題にするといっても、それらに関する過不足なき分析と総合は、私の能力の及ぶところではない。主にソ連邦の経済システムを念頭において論じた第Ⅱ部の叙述は、経済理論的スタイルに傾斜しており、主にユーゴスラヴィアの経済システムを素材として論

* 友人の法哲学者・長尾龍一氏によれば、かかる複視を生かす1つの叙述方法がある、と言う。それは、古代ギリシャの哲学者が実行した対話篇による叙述である。左眼を代表する人物と右眼を代表する人物に対話させて現代社会をあらゆる角度から思う存分切ってみるのだ。しかし、私には左の人物と右の人物を自由自在にあやつる思想的力量が欠けているし、両人物の背後にかくれているよりは、いずれかに加担したくなる性向があるようだ。

じた第Ⅲ部の叙述は、制度論的・現実論のスタイルをとっている。その大きな理由として以下のような事情を指摘しておこう。

ソ連邦の経済学雑誌や経済学書を10年以上も読んできて、ブリリアントな知的魅力を感じさせる論文・書物は、1960年代中半以降特にいわゆる数理経済学者達によって書かれることが多く、いきおい彼らの書く論文・書物をヨリ多く勉強するようになり、したがって私がソ連邦の経済システムを考える際にも数理経済学者達が経済理論的に構想するテクノクラティックな最適経済機能システムを基軸に論じがちになる。それに対して、20年以上にわたって労働者自主管理を領導理念としつつ、試行錯誤してきたユーゴスラヴィアでは、ブリリアントな知性の多くが労働者自主管理型社会主義の制度論的・現実論的分析に熱中しており、これらの領域で知的魅力に富む論文・書物を沢山発表している。したがって、それらを勉強して、私が論文を書こうとする時、どうしても制度論的・現実論的記述に傾きがちとなる。もちろん、ユーゴスラヴィア型社会主義経済システムの数理モデル（労働者1人当たり所得極大化行動を企業がとる場合の均衡理論）が何人かのアメリカの経済学者達（B. Ward など）によって作成されている。しかし、それらは、ユーゴスラヴィアの労働者自主管理に見られる正負の多様性をあまりにも歪小化しているし、労働者自主管理を理解するに本質的でないので、第Ⅲ部でもあえて触れていない。また、ソ連邦の数理経済学派による計画経済システムの理論に比して数理モデルとしても単細胞的であり、あまり魅力的ではないことも紹介の労をはぶいたもう1つの理由である。

以上のような理由で、第Ⅱ部と第Ⅲ部の叙述は、一対一の対応性に欠けている。『比較社会主義経済論』で詳説し、本書の第Ⅰ部第2章第2節で要説した社会主義経済研究の方法論によれば、各社会主義経済を理念論・制度論・経済理論・現実論なる三視座四領域のそれぞれで規定・分析すべきなのに、本書の第Ⅱ部・第Ⅲ部ではその要請が部分的にしか実現されていない。

社会主義経済とは、対象国のブリリアントな知性の提供する材料のみを援用して分析し、洞察し切るにはあまりにも複雑な経済社会である。ブリリアントならざる平凡な多数者があらゆる方面で取り組んで作り出したばう大な数の労作を論旨の焦点がぼやけているのにいら立つことをおさえて読んでいくことなしに、社会主義の経済システムを三視座四領域五次元標識のそれぞれにおいて正確に十全に論述することはできない。これは、ブリリアントならざる私達日

本の社会主義研究者相互の有機的分業を必須とするだろう。その意味で私のこれまで行なってきた社会主義経済の研究とそのひとくぎりとしての本書は、序説的なものである。

次に、私が最近になっていただき始めている方法的予感について若干書き記しておきたい。それは、経済メカニズムを市場と計画に分けるディ・ホトミーの不十分性にかかわる。本書においてもこのディ・ホトミーに従って理論的考察がなされており、それなりに有効な分析力を発揮できるものであるが、現代社会主義の将来性について考察（予測プラス構想，認識プラス想像）しようとする時、このディ・ホトミーにこだわらずにつけていけば、それほど意味ある眺望が開けてくるものでもなさそうである。結論を先に言うならば、市場・計画という2種の社会的分業編成様式に加えて、第3の様式、すなわち〈互惠〉ないし〈互酬〉と訳されている Reciprocity を視野に入れる必要がありそうだ、という予感である。

このようなトリ・ホトミーは、すでにカール・ポランニー Karl Polanyi* とボールディング K. E. Boulding が何冊かの著書で明確に定式化している。

ポランニーは、経済という概念に「形式的意味」Formal meaning と「実体的意味」Substantive meaning を区別する。前者は、オスカー・ランゲが『政治経済学』（合同出版、1964年）で詳細に説いたコタルビンスキの「プラクシオロジー」、あるいは「合理的行為の論理学」に近似せる概念である。経済の歴史的な存在様式を理解する上で後者の意味を重視するが故に、ポランニーとその後継者達（G. Dalton, P. Bohannon）は、実体主義者 Substantivist と呼ばれている。彼によれば、実体的意味の経済は、制度化されることによって経済過程の統一性と安定性、すなわち諸部分の相互依存性と反復性を身につける。そして、かかる統一性・安定性・相互依存性を保証するものとして「統合の形態とでも呼べるような、ごく少数のパターン」（私は、これを社会的分業の編成様式と呼んだ）、あるいはそれらの組み合わせが挙げられている。「経験的に言って、主要なパターンが互酬と再分配と交換であるということをわれわれは見出す。互酬とは対称的な集団間の相対する点のあいだの移動をさす。再分配は、中央に向かい、そしてそこから出る占有の移動を表わす。交換は、こ

* 以下に引用する書物の他に、長尾／吉沢／野口／杉村訳『大転換』（東洋経済新報社、1975年）は必読である。

ここでは、市場システムのもとでの『手』のあいだに発生する可逆的な移動のことをいう。そこで互酬は対称的に配置された集団構成が背後にあることを前提する。再分配は何らかの程度の中心性が集団のなかに存在することに依存する。交換が統合を生み出すためには、価格決定市場というシステムを必要とする。異なる統合形態がそれぞれ一定の制度的支持を前提とすることは明白である」([1] p. 269, [2] p. 128)。

やや異なるが、同様の思想を展開している経済学者にボールディングがいる*。彼は、社会の中に3つの組織因子 Organizer(「社会的な遺伝子」とも呼んでいる)が働いており、その故に、社会が分解せずに、統合を保って再生産される、と考える。脅迫システム(恐怖)、交換システム、統合システム(愛)の3因子がそれである。ボールディングの脅迫(恐怖)がポランニーの言う〈再分配〉Redistribution に対応し、統合(愛)が〈互恵〉ないし〈互酬〉に対応する。交換は、〈交換〉Exchange である。かかる対応関係(同一関係ではない)は、次のように考えると判然とするだろう。ポランニーの〈再分配〉は、中央・中心を持つ組織構成Centricityを前提とするが、その中心・中央として最高権力が立ち現われるならば、〈再分配〉とは権力の下す命令や指令(それに反するならば、マイナスの利得がもたらされるが故に、脅迫と言ってもよい)による経済財の移動そのものとなるであろう。〈互恵〉とそれを支える集団の対称的構造 Symmetry について論ずる時、ポランニーは、アリストテレスの言う「一種の善意(フィリア) Philia」([1] p. 272, [2] p. 130, 傍点は岩田)と「互酬関係(アンティペポントス) Antipeponthos」([1] p. 272, [2] p. 130)の相関について触れ、続いて、「共同体の成員が互いに親密性を感じれば感じるほど The closer the members of the encompassing community feel drawn to one another, 時、空、その他の面で限定されたさまざまな特定の関係に関して彼らの間に互酬的態度 Reciprocative behavior が発達する傾向が、より一般的になる」([1] pp. 272—3, [2] p. 130, 傍点は岩田)と書いている。この叙述内容は、統合(愛)に関する説明であるとしてさしつかえなかろう。もちろん、両者の間に差も存在する。例えば、ボールディングにとって、統合システムは、他の2種の組織因子が有効に働くための母

* ボールディング著・公文俊平訳『経済学を越えて』(学習研究社、1975年)所収の論文「経済的自由放任主義」と「倫理と実業・一経済学者の見解」を参照。公文訳『愛と恐怖の経済』(佑学社、1974年)もチャミングである。

体（基体）であると観念されているが、ポランニーにあって、〈互惠〉Reciprocity とは〈再分配〉Redistribution と〈交換〉Exchange に同一レベルで共存し、あるいは組合わされる統合のパターンなのである。

本書の序章でポランニーとボールディングの比較検討をしようとは思わない。私がここで語ってみたいのは、次のような社会観である。

人類の社会史を近代以前（伝統的社会）と近代以後（現代を経て未来へ）に分けてみよう。伝統的社会において、〈互惠〉〈再分配〉〈交換〉、あるいは統合（愛）・脅迫（恐怖）・交換というトリアードは、無為によってある種のバランスを保って、社会の中に埋め込まれており、またその故に経済財の定常的再生産を社会に保証していた。そこには、伝統のもたらす幸と不幸、歓喜と悲慘が分離しがたくからみついていた。遅々たる進歩と変化の結果、突如として登場した近代は、かかる宿命的な幸・不幸を人間理性の制御の下におこうと試み出したのだ。宗教改革、フランス革命、ロシア革命と続く一連の事件は、近代の自己表出であった。

フランス革命の三色旗、それが象徴する 3つの価値理念、〈自由〉〈平等〉〈友愛〉のトリアードは、極めて暗示的である。伝統的社会の中に無自覚のまま自律神経のごとく恒常的に働いていたあの 3種の「統合形態」、「組織因子」、「社会的な遺伝子」が自覚的に、中枢神経のごとく名乗りをあげたかのようにある*。人為＝文明の最高の成果として自由を欲し、平等を望み、友愛を求めんとしたのだ。この瞬間、人為＝文明の背後で自然的バランスを保っていた 3種の社会的遺伝子が人為化＝文明化を要求し始めた。その結果、あるものは肥大化され、他のものは至小化された。

自由という価値（理念）語の追求とその普遍化は、その経済（メカニズム）語への翻訳である市場メカニズムによる基幹的経済活動の包摂とその拡大再生

* ヨーロッパ思想に暗示されている（と私が了解する）このような価値理念のトリアードと社会的分業編成様式（統合形態、組織因子）のトリアードとの照応関係は、東洋の伝統的価値理念のセット、例えば孔子教の説く仁・義・忠・孝・悌・礼・智・信という価値理念の背後にそれらが代表する経済的再生産の諸制度を見い出しがたいことに対比するならば、社会思想史的に興味ある問題を私達に投げかけているように思える。忠を理念とする制度として君臣関係、孝に親子関係、悌に兄弟関係が見て取れるとしても、経済社会の再生産のパターンとは言いがたい。強いて言えば、これらは、ポランニーが前記のトリアードと並んで重視した〈家政〉Oeconomicaの記憶に通じるものかもしれない（『大転換』の第4章「社会と経済システム」を参照）。

産によって保証される。現在、「自由化」といえば、「市場化」のことである。資本主義は、この近代的課題に成功した。社会に埋め込まれていた〈交換〉は、商品生産＝市場メカニズムという形で文明化され、自由の名の下に逆に社会を呑み込もうとした。言論の自由、思想の自由、商売の自由、破産する自由、投機の自由、一家心中する自由、売春する自由……。

自由の一方的追求に続いて、平等の追求が企画された（ロシア革命）。平等という価値語の追求とその普遍化は、その経済語への翻訳である集権制計画メカニズム Centralized planning mechanism（ポランニーのいう中心性 Centrality の機構）による基幹的経済活動の包摂とその拡大再生産によって保証される。平等が〈再分配〉を指向する理念であることは、万人の目に明らかであろう。国権主義的社会主義は、この近代的任務に成功した。文明の要求する自由の恐怖を避けて、人々は、文明化された〈再分配〉の装置である計画という指令・命令に身をまかせた。平等な賃金、利潤の廃止、平等な就職の保証、平等な年金。しかし、同時に平等な言論統制、平等な不自由。

要するに、フランス革命のかかげた自由と平等の理念は、ブルジョア革命とプロレタリア革命を契機にして、社会的・歴史的規模で実験されたのだ。後者は前者に比してヨリ意識的に。それにともなって、ボールディングのいう社会的遺伝子、ポランニーのいう統合形態のうち〈交換〉と〈再分配〉（脅迫システム）は、伝統の胎内で共生していた〈互惠〉から切り離され、文明の光明の下におどり出たのだ。しかしながら、それぞれの文明化は、一面的・偏面的であり、他の2者を歪小化するものであった。

現在、自由を基軸においた経済社会の編成は、平等を副次的にするだけでなく、理念としての自由そのものを半ば絵空事にしている。現代の自由主義諸国の企業や工場の内部における言論・思想の徹底的な不自由を見よ。企業外・工場外における市民的自由の保証との間に見られる余りにもあざやかな対照！

さらに、平等を基軸においた経済社会の編成は、自由を副次的にするだけでなく、理念としての平等そのものを半ば絵空事にしている。現代の社会主義諸国における中心集団（共産党上層・高級官僚）が享受している物質的・精神的特権を見よ！

このような現時点＝近代の解体としての現代に立って、現代社会主義の生命力にこだわりつづけながら、将来の展望を試みるとすれば、軽視された自由（および市場の意識的利用）と並んで忘れさられた価値理念である友愛を真剣

な考究の的にする必要性に思い至るのだ。友愛をその理念名とする〈互惠〉、あるいは統合システムを伝統の中から、伝統が破壊されつくす前に救出し、文明化する試行が残されている。かくして、自由の横暴と平等の悲劇を経験した今日、3種の社会的遺伝子のすべてを有機的に文明化することによって、自由・平等・友愛のトリアード全体を保証する課題が私達の前に厳存しているのではなかろうか*。しかし、私達現代人は、友愛を情緒的・人生論的な友情とか赤い羽根やチャリティー・ショーのような臨時的・通過的慈善とかいう形でしか感じ取れない。それ故に、A図の第三世界に現在も残っている、あるいは最近まで残っていた〈互惠〉システムに関する経済人類学の研究成果（例えば、マリノフスキーの発見したトロブリアド諸島におけるクラ交易など**）が現代社会主義の再生に貴重な反省材料を提供するだろう。いわゆる第三世界の研究の中にかかる現代的意味があることを示唆してくれた知恵者は、アジア経済研究所調査研究部の同僚である中村尚司氏である***。

* 私が個人主義や全体主義を克服するイデオとして心ひそかに“諸個人”主義とか連合主義とか特徴付けている未踏社会の思想と近・現代的思想との関係は、以下のごとくである。

理 念	自 由 ↓ 友愛の慈善化 不 平 等	平 等 ↓ 友愛の名目化 不 自 由	友 愛 ↑↓ 平等を媒介にした 自由の復興
担 い 手	個 人 ↓ 資 本 家	全体（社会） ↓ 国 家	“諸個人”=連合 ↑↓ 社 会
経済メカニズム（統合の形態）	交 換 ↓ 市場メカニズム	再 分 配 ↓ 計画メカニズム	互 恵 ↑↓ 市場+計画+X
自然との関係	都市の田園からの 独立	田園の都市化	都市の田園化
社会経済構成体	資 本 主 義 ↓ 混 合 経 済	国権主義的社会主义主義 ↓ 民権主義的社会主义主義 人間の顔をした社会主义主義	X

** マリノフスキー著・寺田／増田訳『世界の名著第59巻・西太平洋の遠洋航海者』中央公論社、1967年。

*** 本書と同時に新評論から出版される予定である氏の『共同体の経済構造』の第1部「対象化された労働の蓄積と交換」を参照。